***Revue japonaise de didactique du français***

**原稿送付状　Bulletin de proposition de texte**

受理日date de réception　　　年　　　月　　　日

|  |  |
| --- | --- |
| 発送日date d’envoi | 年　　　月　　　日 |
| 原稿種別（不要なカテゴリー名を消す）catégorie(supprimer les mentions inutiles) | 論文article研究ノートnote de recherche実践報告compte rendu d’expérience pédagogique書評compte rendu de lecture出版物紹介compte rendu de publicationfiche pédagogique各種報告 autre compte rendu |
| 執筆者名nom(s) (en majuscules) et prénom(s) de l’/(des) auteur(s) |  |
| 所属rattachement(s) institutionnel(s) | （日本語） |
|  | （français） |
| 連絡先adresse, téléphonecourriel |  |
| 団体association | 日本フランス語教育学会SJDF |[ ]
|  | Autre association affiliée à la FIPF (Commission d’Asie-Pacifique) (nom : ……………………….)Joindre un certificat.国際フランス語教授連合（アジア＝太平洋委員会）加盟の他の団体：（団体名：……………………….）証明書を添付してください。 |[ ]
| 題名titre du texte |  |
| 生年月日Année et date de naissance\* |  |

\* 学会賞のための情報。この欄を空欄にすると，自動的に学会賞候補の対象からはずれます。（書評，出版物紹介，fiche pédagogique，各種報告の場合は記入不要。）

題名（スタイル　表題，１４ポイント）

（フランス語題名）（論文，研究ノート，実践報告のみ）

**（**論文および研究ノート以外**）氏名**

**（**論文および研究ノート以外**）（所属機関名）**

# Résumé (スタイル　見出し1) （論文，研究ノート，実践報告のみ）

Le résumé en français du texte vient ici, maximum 200 mots, 11 points en italique, Police : Times New Roman.

フランス語以外の言語での要約です。11ポイント。フォントは日本語はMS明朝，欧文はTimes New Roman.

# Mots clés (スタイル　見出し1) （論文，研究ノート，実践報告のみ）

Les, mots, clés, se, placent, ici (Style Normal), 5, mots, clés, maximum, 11, points.

フランス語以外の言語でのキーワード，key, words, in, another, language，最大５個まで，11ポイント。

# 1 序 (スタイル　見出し1)

　「序」「はじめに」の番号は0ではなく1にします。

　本文は，このようになります（スタイル　標準）。１２ポイント。MS明朝。欧文はTimes New Roman[[1]](#footnote-1).

　句読点については，（．）と（、）を用いず，（。）と（，）とし，全角扱いとします。

# 2 章 (スタイル　見出し1) 総論

## 2.1 節 (スタイル　見出し2)

### 2.1.1 項 (スタイル　見出し3)

　「2.1.1. 項　（見出し3）」はどうしても必要な場合のみ，使用してください。ゴチック体，下線，イタリック体の使用はできるだけ控えます。ダッシュ（—）と長音記号（ー）を使い分けます。

## 2.2節　引用について

　短い引用を文中で改行せずに入れるには，日本語は「　」で，欧文には«　»で示します。引用文はイタリック体にしません。引用中の省略は[…]で表します。長い引用は下記のように改行して引用します。

　引用です（スタイル　引用）。引用です。引用です。引用です。引用です。引用です。引用です。引用です。引用です。引用です。引用です。引用です。引用です。引用です。　　　　　　　　（中村，長谷川，1995 : 155-58）

長い引用文は，左を下げ，本文との間に各1行のスペースを置きます。

Ceci est une citation (スタイル Citation1). Ceci est une citation. Ceci est une citation. Ceci est une citation. Ceci est une citation. Ceci est une citation. (Besse, 1976 : 25)

## 2.3 節　図・表について

　図・表は，それぞれ独立した番号をつけます。（例：表1，表2，表3…，図1，図2，図3…，）図・表はモノクロとし，カラーは使用しません。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  |  |  |
|  |  |  |
|  |  |  |

*表1：表のタイトル　（スタイル　標準）*

　図・表の前後は，本文との間に一行のスペースを置きます。

## 2.4 節　提出前に

　原稿提出前に，以下の点を再度チェックしてください。

1) 文書のレイアウトは以下のようになります。一頁35字×34行。上余白35mm，下・右・左余白30mm，ヘッダー15mm，フッター17.5mm。このスタイルシートを利用して執筆すると，自動的に上記のレイアウトになるはずです。

2) 原稿は，Microsoft Wordで作成してください。

3) 原稿の字数制限（スペースも含む）を守っているか確認してください。字数にはタイトル，サブタイトル，レジュメ，キーワード，注，図表，参照文献リスト，付録なども含みます。論文，研究ノート，実践報告には，参考までに頁数も指示されています。

論文は17枚(20,000字)以内

研究ノート10枚(11,900字)以内

実践報告12枚(14,280字)以内

書評3枚(3,570字)以内

出版物紹介1枚(1,190字)以内

Fiche pédagogique 2枚（2,380字）以内

各種報告のうち学会・スタージュ報告3枚(3,570字)以内

4) 「参照文献」に記載するのは，原稿の中で言及した文献だけです。

5) フランス語や，フランス語以外の一言語でのレジュメ部分は，その言語を母語とする者による校閲を経てください。

# 3 章 (スタイル　見出し1)　文献について

## 3.1 節 (スタイル　見出し2)　著者と執筆年

　文献を本文の一部として読む場合は「Besse (1992)によれば…」のように発表年だけを(　)に入れます。そうでない場合は，「…が提唱されている(Calvet, 2001)」のように，著者名も(　)に入れ，発表年との間をコンマで区切ります。

　ページなどを明示する場合は「Poletti (2002 : 11)」，「(Poletti, 2002 : 11)」のように発表年のあとに記します。

　同一著者の複数文献を一括して参照する場合は，「Porcher (1992, 1996)」，「（Porcher, 1992, 1996）」のように発表年だけを複数個記します。

　同一著者による同一発表年の文献は，「Cuq (1998a)」「Cuq (1998b)」「Cuq (1998a, 1998b)」などのように発表年のあとにa,bなどつけて区別します。

　異なる著者の文献を一組の（　　）のなかに置く場合は，「（田中・他，1994 ; Galisson, 1999 ; Lancien, 1998）のように，同一著者ごとにまとめて間をセミコロンで区切ります。

## 3.2 節 (スタイル　見出し2)　参考文献リストの作成

　本文中で参照した文献は本文のあとに，以下の要領でまとめてリストにします。

・参照文献は，欧文と和文を区別せず，著者の姓名のアルファベット順に，同一著者の文献は発表年順に配列します。

・本文中で発表年にa, bなどをつけた場合は同じ記号をつけます。

・文献番号は付けません。

・各参照文献は，著者の姓名，発表年，題名などの順に記します。

・著書，雑誌などの題名には『　』を，論文題名は「　」を付けます。洋書や洋雑誌の題名，欧文雑誌巻名はイタリック体とします。

・雑誌名や会議名は略記しません。

・インターネット上のサイトやページの場合は，執筆者が参照した日付も記載します。URLは< >の中に入れ，ハイパーリンクは削除します。

・著者名は，アルファベットの場合Besse H.などのように著者の姓の最初の１文字は大文字，後の文字は小文字にし，名前のイニシャルのみを記すか，もしくはBesse, Henriなどのように名前全部を記すか，のどちらかに統一します。

　以下に参照文献リストの項目例を種類別に示します。

# 参照文献 (スタイル　見出し1)

Armstrong N. & Pooley T. (2010). *Social and linguistic change in European French*. New York : Palgrave Macmillan.

浅田浅子 (2012). 「フランコフォニーと多言語主義」，日本フランス語教育学会春季大会発表.

Beacco J.-C. & Byram M. (2003, 2e éd. 2007). *Guide pour l’élaboration des politiques linguistiques éducatives en Europe – De la diversité linguistique à l’éducation plurilingue*. Strasbourg : Conseil de l’Europe, Division des politiques linguistiques.

Besse H. (1976). La norme, les registres et l’apprentissage. *Le français dans le monde*,121, 24-29.

別宮別雄 (2012).「フランス語教授法研究」，博士論文，別宮大学.

Borel S. (2010). *Alterner pour apprendre. Disponibilités du contact de langues pour l’acquisition*. Thèse de doctorat, Université de Genève.

Candelier M. (2008). Approches plurielles, didactiques du plurilinguisme : le même et l’autre. *Cahiers de l’ACEDLE*,5(1), 65-90.

Cuq J.-P. (1991). *Le français langue seconde : origine d’une notion et implications didactiques*. Paris : Hachette.

Dabène L. (1995). La langue étrangère : spécificités d’un objet pédagogique. In Briane C. & Cain A. (dir.), *Quelles perspectives pour la recherche en didactique des langues ?* (pp. 7-10). Paris : I.N.R.P.

Day C., Calderhead J. & Denicolo P. (eds.) (1993). *Research on teacher thinking. Understanding professional development*. London / New York : Routledge.

Dupont I., Durand A. C. & Blanc J.-L. (à paraître). Accent(s) suisse(s) ou standard(s) suisse(s) ? Approche perceptive dans quatre régions de Suisse romande. In Falkert A. (dir.), *Actes du colloque « La perception des accents hors de France »*. Mons : CIPA.

Mombert M. (2001). Enseigner la langue de l’ennemi. In Zarate G. (dir.), *Langues, xénophobie, xénophilie dans une Europe multiculturelle* (pp. 15-25). Caen : CRDP de Basse-Normandie.

中平解 (1952).「フランス語」，市河三喜，高津春繁（編）『世界言語概説』上, 475-538. 東京：研究社.

中村啓佑，長谷川富子 (1995).『フランス語をどのように教えるか』，東京：駿河台出版社．

Perrichon, É. (2008). *Agir d'usage et agir d'apprentissage en didactique des langues-cultures étrangères : enjeux conceptuels, évolution historique et construction d'une nouvelle perspective actionnelle*. Thèse de doctorat, Université Jean Monnet. <https://www.aplv-languesmodernes.org/slip.php?article2029>, consulté le 21 octobre 2020.

Vigner G. (2011). Écrire en FLE : quel enseignement pour quel apprentissage ? In Bouchard R. & Kadifa L. (dir.), *Le français dans le monde. Recherches et applications 51. Didactique de l’écrit et nouvelles pratiques de l’écriture* (pp. 16-33). Paris : CLE international.

Véronique, G.-D. (2017). La grammaire en français langue étrangère : questions d’acquisition et d’intervention. *Lidil*, 56. <https://doi.org/10.4000/lidil.4734>, consulté le 25 juillet 2019.

山崎吉朗 (2001).「中等教育における英語以外の外国語教育についての調査分析」，『フランス語教育』29, 66-76.

# 付録 (スタイル　見出し1)

付録は、3ページ以内とします（スタイル　標準）。

1. 注は脚注にします。脚注はメニューの「挿入」＋「脚注」を使います。10ポイント。フォントはMS明朝。欧文はTimes New Roman。注には通し番号を付します。 [↑](#footnote-ref-1)